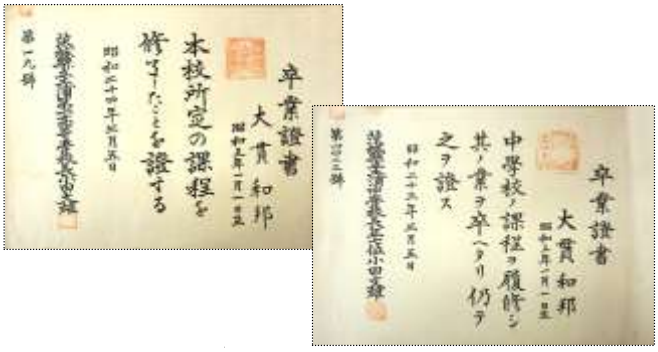
月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１３１号　　２０２０(令和２)年２月４日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/



旧制土浦中學校の卒業證書（昭和23年3月5日）（右）
新制土浦一高の卒業證書（昭和24年3月5日）（左）
（いずれも、中48・高1回大貫和邦所蔵）

土浦中学から土浦一高へ４　～土浦一高発足～

1948(昭和23)年４月１日、「茨城県立土浦中学校」が５１年の歴史を閉じ、「茨城県立土浦第一高等学校」が発足しました。新制高校では、最早、旧制中学校でもなく、旧制高校でもない、新しい学校づくりの模索が始まりました。

引用文中の【　】内は筆者による注記です。

新制小中学校発足

1947年3月5日、1942年度入学生144名は、5年修了で卒業し(中47回。同じく1942年度の入学生であった159名は、4年修了で前年に中46回生として卒業した。)、就職するか旧制の上級学校(旧制高等学校、大学予科、大学専門部、高等師範学校、旧制専門学校)に進学するかしました。

3月31日、教育基本法と学校教育法とが公布され(国民学校令・中等学校令は廃止された。)、前者はその日に、後者は翌4月1日に施行され、新制小中学校が発足しました。6・3制の実施により、旧制中学校の生徒募集は停止され、学校教育法による中学校(新制中学校)が、旧制中等学校内に併設されました。これは、旧制中等学校に在籍する学齢生徒(義務教育を受けることが適切とされる年齢の生徒)の新制高校への入学のための措置として、1947年4月からの2年間、中等学校に設けられたもので、旧制中学校1・2年修了者を新制中学校(併設中学校)の2・3年生として収容しました。併設中学校は、あくまで暫定的、経過的な措置として設置されたため、新たな生徒募集を行わない、2・3年生のみの中学校でした(1年生に相当する生徒は、別に設けられた新制中学校へ入学した。)。

本校でも、1945年度入学生が併設中学校の3年生と、1946年度生が2年生とされました。旧制中学校の3・4年修了者は、そのまま旧制中学校4・5年生として在籍していて、真鍋台の校舎には、茨城県立土浦中学校と茨城県立土浦中学校併設中学校とが併存することになりました。旧制の土浦中学校は依然として存続していて、校舎、教師、生徒も同じであったために、併設中学校の2・3年とされた生徒たちは、「自分たちも土浦中学の2・3年生である。」との意識で生活していました。

土浦一高発足

翌1948年1月24日、本校では、新制高校準備委員を選ぶ選挙が行われ、永山正、清水繁次郎、小沢永次郎、福田仁、石崎正雄、飯島徹男、林卯一郎の7名の教諭が選出され、土浦一高設立の準備が始まりました。

3月5日には、1943年度入学生314名(中48回)の卒業式が(進路は、家業を継ぐことを含む就職、旧制高等学校等の上級学校への進学、新制高等学校進学とに分かれた。)、20日には併設中学校3年生444名(1945年度入学生・併設中1回)の卒業式が行われました(進路は、就職と新制高等学校への進学とに分かれた。)。29日には、(土浦一高)通信教育部生の入学者選考も行われ、男子100名、女子23名が入学し、第1回生となりました。

4月1日、学制改革により、旧制中学校・高等女学校・農学校・工業学校・商業学校が廃止され、新制高等学校(現高等学校)が発足しました(6・3・3制)。

旧制中等学校卒業生の希望者を新制高校3年生として、旧制中等学校4年修了者を新制高校2年生として編入し(編入を希望しない者には、5年修了で旧制中等学校の卒業が認められた。)、併設中学校の卒業生(1945年度旧制中等学校入学生)が、新制高校1年生となりました。併設中学校は新制高等学校にも併置されていて、1946年度に旧制中等学校へ最後に入学した3年生を残すのみとなりました。

新たに発足した茨城県立土浦第一高等学校への入学資格は、新制中学校3年卒業で、修業年限は、全日制普通科が3年、定時制普通科は4年。定員は、全日制普通科が16クラス1050名、定時制夜間部普通科は7クラス400名、通信教育部100名の学校となりました。正門(現旧正門)の門標は、「茨城県立土浦第一高等学校」と変わり、校章は、「高」の字に桜水をあしらった、土浦中学時代より小ぶりのものに決まりました。4月15日には、新制高校1年生の入学式が講堂で挙行されました。

土浦一高の3年生は、3月5日に卒業した中48回生の希望者が殆どで、それに、中44回と47回の少数の旧制中学校既卒者(翌年の新制大学の入試を受けるには、新制高校卒の資格が必要であった。)と2桁の他校からの編入者とでした。そのため、この年次だけは、「旧制」中学校の卒業証書(大部分が中48回)と「新制」高校第1回の卒業証書とを持っています。

他校からの編入者の中で、岡山県立第二岡山中学校(現岡山県立岡山操山中学校・高等学校)から転入してきた高1回高木尚道は、中48・高1回屋口正一著『櫻水物語(三)土浦一高元年』の中に、「思い出」と題して、土浦一高転入に至る経緯を次のように記しています。

「昭和二十三年三月旧制第二岡山中学校を卒業し新制高等学校発足と共に土浦第一高等学校に編入され一年間の高校生活後茨城大学に幸にも入学しました。一年間のみの高校生活でしかも大学受験に追われ今色々と振返ってみて残念ながら一高での思い出が特にありません。

私は昭和十九年十月、逗子開成中学校【現逗子開成中学校・高等学校】二年時学徒動員で日立製作所戸塚工場で働き、二十年三月鎌倉から父母の故郷である岡山へ転居(父は横須賀に残る。)。市内の叔母の家から第二岡山中学校三年に転入し、岡山市内への米軍の空襲で学校及市内丸焼の経験をし、八月十五日の終戦を迎え、昭和二十一年家族は父が復員

後茨城県稲敷郡阿見町の旧霞ヶ浦飛行場入口にアメ工場新設勤務した関係で移りましたが、私は中学卒業迄岡山に在住し、昭和二十三年三月両親の下に帰り、学制改革による土浦一高三年に編入されたわけです。この様な生活環境の変化で土浦一高での一年間の中で唯一の思い出として今も思い出されるのは教科の中で一番好きであった数学が第二岡山中学校では卒業迄に微分積分確率迄を終えておりましたが、土浦一高では微分が始まったばかりであったので非常に楽であった思い出があります。又大学受験についても早稲田大学理工学部に入りたかったが学制改革時の初年度で理工学部は募集しないとの事で茨城大学受験となったという昭和二十三・四年頃は終戦の混乱いまだ続いて居り学制改革と重なったという世の中の変化が大きかった為、その思い出の方があまりにも強すぎる様に思います。」

土浦一高の2年生は、土浦中学校の1944年度の入学生で、4年を修了し、土浦一高への移行を希望した者(高2回)です。希望しない者には、経過措置として、5年修了での土浦中学校の卒業が認められました(中49回)。

1年生は、土浦中学校の1945年度入学生で、併設中学校3年を卒業し、土浦一高1年に編入された者(高3回)で、土浦一高への切り替え編入を希望しない者は、3年を卒業し、就職或いは他の新制高校への進学を選択しました(併設中1回)。

併設中学校は、3年に進級した1946年度入学生だけになりました(彼らは、後輩のいないことを非常に口惜しく残念に思っていた。)。が、土浦一高生となった彼らの先輩も、同じ土浦中学校への入学生であり、高校と中学校との間に隔たりはありませんでした。ただ、併設中生には出場資格がないために、高校の部活動には参加できず、彼らは併設中生だけでチームを作り、他の併設中或いは新制中のチームと練習試合をして鬱憤を晴らしていました(高4回・本校第24代校長大曽根宏亮たちは軟式野球チームを作り、土浦二高併設中のチームと試合をしている。これが軟式野球部の始まりとなった。)。

土浦一高3年生となった高1回杉山(旧姓・宮本)弘は、当時の学校生活を前掲書『櫻水物語(三)土浦一高元年』で、「充実の一年」と題して、次のように述べています。

「新制高校へ進んだのは、特に目的を持って進んだのではなく、進学も就職も駄目で仕方なくもう一年行こうという風だったと思います。

高校三年に編入になることについては、中学の延長のような気持ちでしたが、今まで一緒に通学していた友達が卒業してそれぞれの道に進んで行くのを見ていると、自分が独り取り残されて行くようで、気持ちも落ち着かず勉強には熱中できませんでした。

当時進学した友人達は、リーゼントという髪型をして、角帽に制服姿という格好で土浦の街を歩いているのに出会い本当に大人っぽく見え、羨ましかったものです。

二学期頃になると、進学組と就職組に分けられ、私は就職組になったと思います。

この就職組が、就職の準備ということで、ある日市内の銀行へ見学に連れて行かれたとき、五年で卒業して銀行に就職していた某君が、背広姿で仕事をしているのを見て立派なものだと感心しておりました。

今でも印象に残っているのは、英語の小沢先生のことです。

昭和二十二年五月に新憲法が公布されており、先生は、新憲法の英文版テキストを使い、この授業では、単に英語の勉強ということばかりではなく、新憲法が目ざす平和への理想というようなことについても熱心に講義をされ、感銘を受けたものでした。……(後略)……」

また、高1回根本隆は、同じ前掲書の中で、「高三時代」として、戦後の混乱期に苦悩する青年の心情を次のように述懐しています。

「土浦中学の入学試験は難しかったが、入学したくて勉強に努力した。新制高校は受験という緊張もなくそのまま進級した。

世の中は戦後の混乱期で、何もかも整わず全てに統一もなく制服もなかった。中学時代のカーキ色の学生服や黒の詰衿の服を着用したりで、とにかくある物で凌ぐしかなかった。

終戦を境にアメリカ当局によって、それまでの全体主義(国家主義)教育から民主主義教育に俄に転換された。教科書は墨で黒く塗り潰されて、今までの教育は全て悪とされ民主主義が押し進められた。“自由”“個人主義”“民主主義”という言葉の氾濫の中で何か特別な解放感を抱いたが「民主主義」という言葉の概念も全く理解できなかった。歴史や道徳の価値観も逆転しどこに基準を置いたらよいのか迷った。

民主主義社会となっては大学も出なければ一人前にはなれないと考えて志望したが大学受験といっても今のように予備校もなく特別な受験指導もなく何をどう勉強したらよいのか考えあぐねた。結局高校課程の勉強で東京に出て心細い思いで大学入試に臨んだ。……(後略)……」

定時制夜間部

本校定時制は、新制高等学校の発足と同じ1948年4月1日に、「茨城県立土浦第一高等学校に夜間制高校を併置する」という形で開設されました。5月1日、第1学年普通科100名を募集し、志願者78名中68名(うち7名は女子)が合格、5月10日に入学式が挙行され、64名が入学し、初の女子生徒が誕生しました。

定1回助川弘は、

「清水繁次郎先生と本間七郎先生が定時制専任で、他は全日制から熱心な先生方が兼任されました。残念なことに当時はまだ電灯設備が設置されておらず、夏の陽の高いうちでも五時から七時頃までの授業で、正課の九時十分までは勉強したくても暗くて出来ませんでした。九月末【28日】にやっと電気がついて授業が出来るようになりましたが、電力事情が悪くしばしば停電に見舞われました。そうなると黒板の字が見えませんので、暗い教室にろうそくを灯して先生のお話だけを伺いました。」(『進修百年』所収「定時制の創立」)

と当時の学びを振り返っています。

定時制第1回生の茶話会(昭和24年12月)
最前列中央に4名の教諭が並ぶ。左から、林卯一郎、長南俊雄、土井鱗助、本間七郎。
(『進修百年』より)

(高21回　松井泰寿)